

〔南留別志〕<sup>五</sup>「ねこまを略してねこといふ、こまといふも略言なり、

〔圓珠庵雜記〕猫子コマ子鼠子待子の略か、鼠の類につらねこといふあれば、ねことのみいふは略語の中にことわり背くべし猫の性は鼠にても鳥にてもよくうかゞひて、かならず取り得んと思はねば、とらぬものなり、よりて待ちとつけたるか、

頭註眞淵云、たゞ睡獸の略なるべし、けもの、反となり、或人、苗の字につきてなへけものかといへるはわろし、

〔兔園小説二集〕まみ穴まみといふけだもの、和名考并にねこまいたち和名考、奇病、附録

著作堂主人稿

猫は和名鈔部毛群に、和名禰古萬なり、玄かるに中葉より下略して、禰古といへり、枕草紙翁丸に、うへにさふらふおんねこは云々といひ、又源平盛衰記義仲の段に、猫間中納言の猫に、間の字を添へたり、こは猫一字にてはねこと讀む故に、猫間と書きたるなり、これふるくよりねこまといはず、ねことのみ唱へ來れる證なり、玄かれども彼を呼ぶときは、上略してこま〜といふ事、枕草紙これの段翁に見えて、今も亦玄かなり、いづれまれ略辭なれば、物にはねこまと書くこそよけれ、契冲雜記に、猫はねこま、鼠子待子の略歟、鼠の類につらねこといふあれば、ねこまといふは略語の中に、ことわり背くべし猫の性は鼠にても、鳥にても、よくうかゞひて、必とり得んと思はねばとらぬものなり、よりて待とつけたる歟といへり、その書の頭書に、眞淵云、ねこはたゞ睡獸ケラリケモノの略なるべし、けもの、けの字反、コなり、ある人、苗の字につきて、なづけしもの歟といへるはわろしといへり、解按するに、兩説共にことわり玄かるべくもおぼえず、鼠子待は求め過ぎたる憶説なれば、今さら論ふべくもあらず、ねむりけもの、義といへるも、いかにぞやおぼゆ、大凡睡を好むけものは、猫にのみ限らず、狸、貉、鼬の類、みなよく睡るものなり、わきて陽睡をたぬきねむりと唱へて、ね